

# 中井正一と図書館のコミュニケーション

中 村 保 彦

## 1. 序、中井正一と図書館

### 1. 1 図書館の実践

若いライブラリアンのほうは、中井の名前も知らない世代が増えてきている(鈴木正1988 461)、と嘆きのような言葉が書かれてからすでに20年が過ぎた。そして、中井正一が全力を尽くした図書館法(1950年4月30日公布、法律118号)の精神すら見失われているのが、今日における図書館界の現状だろう。彼が『世界文化』に発表した「委員会の論理」や『土曜日』などに見られる反ファシズム運動、そして戦後すぐの尾道での文化活動に関しては、多方面からの論稿がある上に論じる視点も多岐にわたっている。しかし、まとめようとして結局果たせなかつた図書館論や戦後の尾道市立図書館長、国立国会図書館副館長、そして日本図書館協会理事長としての図書館の実践に関しては、「中井正一の戦後の活動に関する文献」から図書館人および図書館関係者による文章を見てみると、短文や回想録の類があるものの論稿は多いとはいえない(平川千宏1989)。それゆえ、中井と図書館の実践に関する問題は、今後も発展的に論じる余地が残されているように思う。まず、本論へ入る前に、『國史大辭典』の記事(鈴木1989)と「中井正一略年譜」(稲村徹元1981)などに依りながら中井の伝記的な略歴をたどっておきたい。

中井正一は、1900年2月14日、広島県加茂郡竹原町(現竹原市)に生まれる。父真一、母千代ともに浄土真宗の篤信者であった。広島高等師範学校附属中学から1918年第三高等学校(文科)に入学。入学するも人生問題に悩み一年休学して、摂津富田(現大阪府高槻市)の利井鮮妙が主宰する行信教校にて浄土教の宗乗(仏教哲学理論)に参入する(この時期の事情は、フィクションとはいえ中井の母千代からの聴き取り等の丹念な調査を元に書かれた、山代巴『千代の青春』に窺える)。1922年京都帝国大学文学部に入学し深田康算、九鬼周造らの教えを受けて美学を専攻する。1925年に大学卒業。1933年京大、瀧川

事件が起こり、文学部を中心とした学生の抵抗組織の中心となる。また、1935年『美・批評』を拡大・発展して『世界文化』創刊し34号まで刊行。「委員会の論理」は、13～15号に発表した。そして、1936年には、広く市民・勤労者のためにタブロイド判『土曜日』創刊し、戦争とファシズムに対しヒューマニティとリベラルの精神で抵抗したが弾圧される。1940年治安維持法違反で懲役二年(執行猶予二年)の判決を受ける。1945年4月郷里尾道に疎開した後、同6月尾道市立図書館長に就任、1946年には広島県地方労働委員長となりユニークな啓蒙運動を展開した。1948年国立国会図書館副館長に任命され、国政に関する資料調査を主権在民の原則のもとに進めるため国立国会図書館の創設に従事し、1949年日本図書館協会理事長に就任(1951年5月再任)する。

「上からの民主化としての国立国会図書館法と、下からの運動としての図書館法」という条件下に全力を投入する(丸山1973 548)も激務のため1952年5月18日胃癌(丸山1973は、肝臓癌と記述)により亡くなる。

本稿は、中井が夢をかけた図書館の実践に触れつつ、次節に述べるコミュニケーション史的な視点から、「委員会の論理」に論じられた大衆の表現と自己疎外の問題や『土曜日』に見られる読者のコミュニケーション、とりわけ読者とリテラシーの問題を追究する。また、久野収[1910-1999]がコミュニケーションと図書館に関して述べた内容(久野1996)を敷衍しつつ、図書館のコミュニケーション論的な可能性を捉えなおそうと考えた。マス・ディアが圧倒的に氾濫する現代において、従来の図書館論には、「コミュニケーションの一機構を形成」しているはずの図書館(裏田1977 33)に関するコミュニケーション論的な視点が看過されていると思ったからだ。

## 1. 2 コミュニケーション史の視点

なぜ、歴史に学ぶのか。中井より少し後に生まれた歴史家の北山茂夫[1909-1984]は、1930年代に大学へ入り歴史学の修行時代を送った。そして、「北山氏が全人格的に生涯対峙した古代史のごとき、一体今なぜ、1000年も2000年も昔のことを追求する」のかという問いに関して、北山のモットーが「歴史の本当の姿の感動を正直に書く」ことにあったという(山尾1995 38-39、北山1985 179)。そこには、歴史家としての歴史を生きた人間主体にこだわる強い歴史意識が

あった。同様に学問のテーマは異なるが、「委員会の論理」を構想した中井にも、歴史をコミュニケーションとの関連に着目した独自の歴史意識があったといえるだろう。

コミュニケーションという言葉在日本において使い始めたひとり、鶴見俊輔は、中井正一の「委員会の論理」などの論文を評価して「心の外にあるものをとらえて、そこから内なるものにいたる道をさがすという、コミュニケーション論の視点、コミュニケーションの発達との関連において思想をみるというコミュニケーション史の視点が、中井正一の諸論文にはっきりとあらわれている」と述べている。中井は「委員会の論理」において、歴史の各時代におけるコミュニケーション的な特徴から各時代の考え方、思考様式を捉えようとした。その視点は確かにユニークなコミュニケーション史の視点といえるだろう。鶴見は、さらに、「マス・コミュニケーションがあらわれてからも、それがコミュニケーションの全領域をおおうなどということはないのであって、なおもコミュニケーションの問題がより根本的なものとしてのこっている」とも言及している(鶴見1973 5、18)。

「委員会の論理」は、コミュニケーションの問題を軸にした歴史意識に立って構想された論文とはいえ、副題「一つの草稿として」が表すように未完の印象があり、「中井が引き受けていなければならなかったはずの課題」が「委員会の論理」の中に十全に追求されたとはいい難い(竹内1980 142)。竹内が論じる文脈から考えられる問題は、「委員会の論理」の要となる「集団的主体性」における大衆と主体の言語に関することだろう。とりわけ言語に関しては、読者論に関わる教育とリテラシーの問題が看過されているように思う。もちろん、教育とリテラシーの問題は、中井が生きた時代の学問水準や環境から考えて、彼には見えにくかった問題といえる。また、教育の問題に関係して、前述の鶴見が「コミュニケーション史を考えてゆくことは、教育の方法を考え直すことにもなる」(鶴見1973 18)と興味深い言及をしているのだが、管見によると、中井と図書館に関係する論稿において教育の方法を扱ったものは見当たらない。これらの諸問題に関しては、後の章に扱うこととしたい。

それから、彼のコミュニケーション史的な視点は戦後の図書館論や図書館の実践とどうつながるのだろうか。中井が東京に来て図書館関係の実践活動

を行えたのは、結果的に、国立国会図書館副館長に赴任した1948年4月から現職のまま亡くなる1952年5月のわずか4年しかない。その間、『図書館雑誌』をはじめとする紙誌に短文とはいえ情熱のこもった図書館論や実践活動の教訓になる文章を発表している(丸山1973 545)。そして、それらの図書館論は「委員会の論理」を基調にしたものだという考えも、大方の論者に共通している(岡村1980、酒井1981など)。彼の図書館論の大半は、『文化と集団の論理』(中井1981、全集4)の第4部に収録されているが、そこに頻繁に現れるのは、「機能概念」という表現だ。これは、「委員会の論理」(全集1 46-108)に取り上げているカッシーラ [Cassirer, Ernst 1874-1945] の「実体概念から機能概念へ」という理論を図書館論に応用したものだといえる。機能概念は「委員会の論理」の文中、窓の概念を例に「要素の函数的複合体」として説明している(全集1 88-89)。図書館論に見られる例としては、「図書館は、本の量と、館のスペースをもって誇り、互いに威張り合う、孤立した『実体概念』としての図書館概念では、ありえなくなりはじめている。(中略)いわば、『実体概念』としての図書館から『機能概念』としての図書館にみずからを転移しつつある」などがある(「移りゆく図書館の概念」全集4 278-279)。この文章の元は、岩波の『図書』1950年2月号に掲載され、従来の実態＝スペース(書物の庫)としての図書館像から機能＝はたらき(資料組織、運用)としての図書館像への概念の転回を論じているのだが、大学図書館を例にとるなら、この「本の量と、館のスペースをもって誇り、互いに威張り合う」図書館像は、彼の論から後も2000年の手前までのほぼ半世紀は続いていたように思う。

## 2. 集団と読者の言葉

### 2. 1 関係性と平等

『中井正一全集』の編集をした久野収は、かつて『図書館雑誌』のインタビューを受け、コミュニケーションと図書館に関して意見を述べたことがあった(久野1996)。このインタビュー記事は、短いながらも根源的なコミュニケーション論・図書館論を提示している。久野によると、戦後アメリカから輸入した外来用語のうち、「アイデンティティーという言葉とコミュニケーション

ンという言葉の訳語はついに見つかっていない」ことから、コミュニケーションという言葉の示す行動が日本でついに名前をもてなかったという結論になりはしないか、と述べている。この二つのカタカナの言葉には、もちろん、辞書的な訳語があり当てはめることも可能だとしても、確かに、心に納得するような訳語はまだない。さらに、デューイ[Dewey, John 1859-1952]が、地球上の一人一人が自らのアイデンティティーをもちながら同時に人類の一員であることを示しうるのはコミュニケーションの結果であり、コミュニケーションを驚異(wonderful)な現象だと称賛したことを引用して、だが、「なぜ日本にはコミュニケーションという言葉がなりたたないのか」を考えはじめたという。そして、その理由は、日本語が敬語、卑語の別によって自他を区別する上下関係優位の言葉として存在し、「タテマエは書かれた言葉」によって行われ「ホンネは方言言葉」によって話されるため、内外・上下・親疎によってコミュニケーションが差別されていること、つまり、相互に平等なコミュニケーションが成立しにくい点にあると述べている。また、価値の上下を壊すには、フランス革命が掲げたような外に向かって開かれた「友愛」が要るとして、コミュニケーション成立の条件に平等な人間関係と友愛をあげている(久野1996 37-39)。

久野がいうコミュニケーションの差別的な状況は、日本の図書館に関しても裏田武夫が別の視点から、「イデオロギーと図書館」(『図書館ハンドブック』第4版)として論じている(裏田1977)。裏田は、図書館は封建的体制の下にあって社会制度として素朴な原型を保ちながら、資本主義体制に至ってはじめて公的な社会制度として成立したとして、「わが国の公的な社会制度としての図書館は明治期に発生したが、それは共同体の要求に支えられ、国民の権利としてヒエラルキーの底部から胎生したいわゆる〈生まれた図書館〉」と異なり、「良心的インテリゲンチヤによって文明開化のシンボルとして輸入され、公権力によって国家整備の一環として「お上から下附された〈作られた図書館〉」だったとする(裏田1977 27)。それは、戦前・戦中の日本の図書館において、図書館側あるいは発行者側が読む側の市民より偉くて(久野1996 39)、「思想善導」のための機関として機能したことからわかる。上から「作られた図書館」に平等なコミュニケーションなど望めるはずがないにしても、平等な

コミュニケーションの実現には何が重要だったのか、次節に中井が係わった『土曜日』に注目して読者論の視点から追求する。

## 2. 2 『土曜日』の読者と浪江虔の「読み仲間」

『土曜日』について(久野 1962)によると、『土曜日』は1936年7月から1937年12月までの期間、京都で発行された反ファシズムの同人グループ的文化新聞だった。タブロイド型6頁、一部3銭、月2回刊の3000部から多い時には7000部発行され、配布網はほとんどが京阪神地域だった。6頁の各面は、巻頭言、文化、社会、婦人、映画、クラブの各欄にわかれており、1937年6月5日号の映画評の頁には、若き日の淀川長治も「楽しく見た映画」と題して、映画「失われた地平線」への文章を寄せている(三一書房1974 132)。また、中井は巻頭言の大半に無署名で執筆している。現在、『土曜日』の全貌は、未収録の号があるものの復刻版『土曜日』(三一書房1974)によって窺える。1936年7月4日の創刊号は、「京都スタジオ通信改題」とあり、通号12号の通しナンバーをもっている。その第1頁を見ると、平和な感じの絵が中央に配置され、上端に三つのスローガンの語句(その一つに「隔てなき友愛」とある)がある。その下にタイトルの「土曜日」があり、すぐ下にサブタイトル「憩ひと想ひの午后」と続き、その左下に「編輯・林要・能勢克男」と続く。そして、紙面下方に巻頭言の欄と小さく目次欄がある。従来の中井論においては、当然のことながら彼の巻頭言だけが取り上げられ注目されることが多かったけれども、『土曜日』の資料全体としての再評価、時代を表現するメディアとしての位置づけが今後行われるべきだろう。今日でこそ、マス・メディアの圧倒的な隆盛のなかにあって、マスコミに対する「ミニコミ」的なメディアの機能や情報が注目され評価されつつあるけれども(平川2002)、『土曜日』はその機能においてミニコミ的なメディアの先駆だったといえる。

『土曜日』の読者論的な特徴は、中井の巻頭言や編輯後記などから二つあげられる。ひとつは、流通に通常の書店経由のルートを利用せず、直接購読制や店置きにしたこと。これは、岡村敬二がいうように「ジャーナリズムの、流通における商品化は読者を墮落」へ導くとの意識が編集同人にあったからだろう(岡村1980 37)。巻頭言「文化的使命を忘れて新年の生命はない」(1937

年9月5日)に「われわれは今日の大新聞を見ると(中略)やたらに大きな活字ばかりが躍っている。そして、戦報に関する『事実』よりも特派員や編輯者の作文的な『言葉』があまりにも幅をきかせてすぎている」として、「大新聞の今日の特活字が、その商業主義に奉仕しているものとすれば、われわれの甚だ心得難い気持を如何にすべきか」からも窺える(久野1962 236-237)。もうひとつは、読者が同時に執筆者となるようなコミュニケーションの回路を期待したこと。これは前節にふれた久野がいう平等なコミュニケーションにつながる問題といえる。たとえば、「集団は新たな言葉の姿を求めている」(1936年10月20日)の「常に新しい文化を、新しい自らの生活の合理を発見して行くこと、これが生きているということに外ならない。(中略)凡ての読者が執筆者となることで、先ず数千人の人々の耳となり、数千人の人々の口となることで新たな言葉の姿を求めている」や「誤りをふみしめて『土曜日』は一年を歩んで来た」(1937年7月5日)の「多くの幸いではない条件の下に、独立と自由を確保しながら、『土曜日』が生残れるか否か、これを、私達はこの現実に関わりたいと思った。(中略)此の新聞はこれを読む凡ての人々が書く新聞である。凡ての読者は直ちに執筆者となって、この新聞に参加した人達である」にも表われている(久野1962 230-231)。さらに、1937年10月5日(通号42号)の編輯後記は、「非常に澤山の投書で紙面に載せきれない。本号は七〇パーセント投書で埋めた」として『文芸時評』や『映画評』も投書によったと記している(三一書房1974 184)。

しかし、「読者が同時に執筆者になって」と中井が期待した時の「読者」とは誰のことなのか。あるいは、「集団」や「人々」がそのまま読者なのか、あまりに漠然としている。中井や『土曜日』(編集同人)は、当然のごとく自らを表現する言葉をもっている。その点において、知識人の執筆者であり、同時に読者たり得るだろう。しかし、「凡ての読者が執筆者となる」ことを期待している中井は、「すでに啓蒙の側に足をふみいれている」(竹内1980 140)。言葉をもつ者が、言葉をもたないかもしれない読者(集団)に啓蒙的な期待の言葉を語るのは、自らの位置に無自覚な良心的インテリゲンチヤの言動にすぎない。「一方に知識人としての責任主体があり、他方に大衆の生の営みに対する深い信頼があること」が「中井の魅力といかがわしさ」(竹内1980 142)だと

しても、大衆の生の営みをもつ現実の多様性を見ていなかったように思う。あるいは、日常、見えていてもおかしくはない大衆の様々な多様性が、表現の抽象化の際(書き言葉への変換)に捨象されたのかもしれない。なぜなら、大衆の日常の営みが見えていないのに深い信頼をもつことは困難だからだ。だが、中井が大衆の日常的な現実の多様性を意識して、彼の表現自体も反省的に変わっていったのは、戦後、尾道での「聴衆0(ゼロ)の講演会」という表現者としての厳しい現実直面にからだろう。この点に関して、東條文規は、中井が『土曜日』のように「読者が書き手となる新聞」とうたっていても、直接生の大衆と接触することはなかったという。そして、『京都スタヂオ通信』が『土曜日』へ改題となった時点で「生活者の新聞から知識人の啓蒙新聞」に変わったと論じている(東條1979 108、114)。さらに、どんなに大衆と接触し、彼らの生活を見たとしても、それが彼の価値観に影響を与えることはなかったとして、中井には戦前戦後を通じて確固とした価値観があったと評している(東條1979 112)。確かに、確固とした価値観をもった啓蒙の側に立つ知識人の姿は、彼の文章の中にも表れている。たとえば、彼が「最も聴いて欲しい戦争帰りの若い青年ら」は、図書館のすぐ側にある映画館に列をなして並んでいる。一方、誰も来ない講演会を母親と二人、図書館に一時間ほど待って放棄することが二度あったという。そして、「一度は、大衆が愚かであって、啓蒙の困難はいずれの時代でも(中略)ヒロイックな悲劇性を帯びるものである」と止めてしまう誘惑に惹かれたこともあった、と述懐している(全集4 190)。もちろん、今、大衆追随主義的な議論を展開するつもりはない。ただ、この国では「民衆と共にあろうとした明敏な思想家や学究が、民衆とともに一変してしまった例は、枚挙にいとまがない」現実があり(山尾1995 43)、中井の思いも例外とはいえない。しかし、このような啓蒙主義批判の問題は、知識人と大衆といった二項対立的な知識人論の問題と係わり、「そもそも、日本に、大衆の動向から遊離した知識人の優位などあったためしがないのだ」といった柄谷行人が述べる知識人論(柄谷2006 55)にもつながる問題だが、知識人論は別に論ずべき大きなテーマになってしまう。また、本稿の趣旨は戦後の知識人の様々な啓蒙運動を批判することにはない。読者が同時に執筆者となるような大衆の言語形態とは何か、それを追究するため



にいかなる視点が重要なのか、という点にある。したがって、今は知識人論への言及を避けておきたい。

確固とした価値観をもつ中井だったとしても、巻頭言(1936年10月20日)にいう、「言う言葉」から「書く言葉」をもつようになるにも人間はどんなに苦勞をしたことか(久野1962 206)、との歴史へ思いを馳せることから、次の「読者＝執筆者」という期待を実現しようとするなら、より具体的な大衆の多様性を実践的に拾いあげる方法に注目すべきだった。現代の視点からもっというなら、「読む」ということの生活における意味の追究が重要だっただろう。この点に関しては、中井が期待した読者論の視点から少し外れるけれども、浪江度[1910-1999]の農村図書館の実践が参考になる。北海道に生まれ、東京で「純然たる都会人として」育った浪江は、21歳のときに農村を知り、「農民生活の中に読書というものが含まれていないことにびっくりしたような世間知らず」だったという。そして、戦前の1939年、「日本の農業を応用科学のレベルまで高める」という夢を実現するため、鶴川村に私立南多摩農村図書館を開設する(浪江1996 52)。村人が喜んで押しかけて来るものと待ち構えていたが、開館後三月たっても大人の会員は九人、借りて行く書物も予想と異なり、わかりやすい増産の手引式の農業書さえ顧みられないという現実と直面する。村人の無関心の原因がわからず、時には「村民の無気力を罵りもした」けれども、「作った図書館が本当の農村図書館でないということに気がつかなかった」という(浪江1996 53)。その現実から得た図書館論は、「図書館をつくるということは、建物や本の心配をまずすることではない。人を結集することである」というものだった(浪江1958 3)。中井が啓蒙的な位置から「委員会の論理」を執筆し、『土曜日』に「読者＝執筆者」の理念を掲げたのに対して、浪江の農村図書館は、啓蒙的な運動が考え違いだったとの反省からスタートしている。もちろん、時代が同じだからといって、尾道と南多摩という地域の歴史性も運動の目的も異なる実践を一概に比べるのは無理があるだろう。けれども、今は中井と浪江の対応の仕方、位置の取り方に注目してみたい。中井は農村の文化運動において、「読者層とは、一つの生き物である。今、よい青年たちは、本屋と貸本屋の形式で、村をわずかに支えようとしている」といい、よい本の多くは難しく注釈者が要るのだが、その注釈者、中心になる人が農村

には足りないために読書会も続かないという(全集4 164)。それに対して、浪江も、農村図書館運動を始めた時、文化施設などというものは忙しい農民が自ら作れるものではなく代わりに作ってあげてしかるべきものだ、「それが文化運動をやるという者の、当然の義務だ」とする「恩恵的な」図書館の発想があった。しかし、農民が自らの力で図書館を作りあげること、その「実行を通しての自己訓練」が、本当の民主主義社会を作りあげていく上で重要だと気づき、「人々の自主性を損ねずにわきから働きかけていくことのかにむずかしいことかを、いつもしたたかに思い知らされ」たという(浪江1958 5)。「中心になる人が少ない」という視点に立つ中井と「人々の自主性を損なわずにわきから働きかけていく」困難を痛感しつつ実践していった浪江の視点との違いは大きいように思う。そして、浪江は、自主的な農村図書館普及運動は「建物と整った蔵書」という幻想をとことん追い払わない限り実現しないにもかかわらず、本物でない図書館へのあこがれや幻想は根強いという独自の図書館論を展開する(浪江1958 6)。つまり、農村定住を決意した浪江にとって、農村の人々の現実とその多様性を否応なく直視し時間をかけなければ、図書館の実践が進まなかったということだ。「本は読まれてはじめて本になる。同じことで、図書館を図書館たらしめるのは、その利用者である」(浪江1958 20)、「農村図書館は本が主体ではない、本を読んで向上しようという『読み仲間』が主体なのだ。農村図書館の建設とは(中略)『読み仲間』を結集することなのだ」(浪江1996 55)とこの時代に言えた図書館人は少ないと思う。浪江がいう「読み仲間」がその地域に結集し、やがて多数となった時、ようやく、執筆者＝読者という関係を期待し得るのだろう。一方、「田舎の第一線で孤独に戦っている」中井には反動の波が訪れる。「商業資本主義機構の中にしみ込んだボスの封建性は民主的再建に対しては、そのスタートを明らかに拒否しはじめ」、「手塩にかけた好青年が一人、一人去りゆくのをじっと見つむることはいいようもなく寂しい思い」を感じている時、図書館も市の意向によって読書の他の文化運動を全て禁止されてしまう(「地方文化運動報告」全集4 179)。もちろん、浪江に啓蒙的な発想がなかったとはいえない。たとえば、浪江が農村の文化運動について「農民の盲目的な(正しい見透しのない)努力を、科学性をもった一つの運動に高めなければならぬ」と述べ、農民の日

常生活の中には、「あきらめ」や「ひっこみ思案」といった問題が横たわっている(浪江1996 62)、というときの視点には、中井と同様の現実と直面し、同じような考えをもっているように見える。しかし、中井の実践や理念とした読者論には、啓蒙的な知識人による地方文化運動の限界だったというところも酷かもしれないが、浪江が農村の生活者として腰を据えて取り組んだ過程と大衆の生活の多様な現実に対する注目が足りなかったように思う。

### 2. 3 読者の言葉とリテラシー

「読者＝執筆者」の言葉や平等なコミュニケーションを捉えるには何が有効な視点なのか。視点のひとつとして、前節にもふれた読者におけるリテラシー概念を取り上げたい。まず、中井が「聴衆0の講演会」の反省として講演の仕方を変えたという点から、読者あるいは受け手の言葉の問題を考える。彼が「大衆、殊に封建性そのものの中に沈黙している農村の子弟に対して」講演の工夫した点をまとめてみると、①相手が反発する英語やドイツ語のカタカナ用語を使わない、②大事なことは他の言葉に言い換えて二度ずついう、③それに身の回りのわかりやすい実例をあげ、その実例は相手が熟知した簡単な構造のものにする、④語ろうとするテーマに一つの憶えやすい「標語化された言語」をまとめてつける、といった点である。これらの諸点は、現代のスピーチ論や口頭発表の技術から見るとおよそ当り前のことだが、当時の中井ら都会から地方にきた良心的な知識人にとっては苦闘の連続だったのだろう。そして、「彼等は、知識を求めているのではないのである。意識革命をしたいのである」と回想的に述べている(全集4 191、194)。この文章と同じ内容は「農閑期の文化運動」にもあり(全集4 160-161)、他の論者もよく引用に取り上げている内容だ。もちろん、彼が「聴衆0の講演会」に表現した地方文化運動の失敗と反省に対して声高に批判する気などない。けれども、疑問に感じる点の一つある。それは、中井の反省と工夫が、常に講演する側、言葉の送り手側の変化や対応であって、聴衆の方、受け手側の変容(向上)や反応が要求されていないように見えることだ。確かに、受け手側の意識革命は期待されていたとしても、久野が述べた、対等のコミュニケーションにある平等性がそこにはない。それはコミュニケーションというよりも一方的な

モノローグ(独白)に類する構造だ。つまり、知識人が啓蒙の側からいかに封建制の残滓を取り除こうと努力しても、平等なコミュニケーションにつながる受け手側、大衆の自立した姿は見えてこない。それだけ、大衆がその階層性(あるいは階級性)と地域の共同体の枠をこえた言語を獲得するのは困難だということだろうか。しかし、中井の文化運動から影響を受けて大衆の言葉を考え続けた人物に山代巴[1912-2004]がいる。山代は、中井が苦心した「あきらめ根性、みてくれ根性、抜けがけ根性」という標語に関連する講演会へ参加し、聴衆としてスタートしてはいるが、やがて、人々の心に響く借り物でない言葉をつかもうと自らも活動を始める(山代1981、1995)。しかし、彼女も農村の女性の集まりを開いて、「前が広くあいているのに後の方に坐って」前に来ないし、「意見があっても言わない。会が終わって帰り道にがやがやと話す」。つまり、本音の言葉ほどすぐに広がって馬鹿を見るから集会で本音など言わない、といった隣組的な共同体の現実に直面する。そして、「本音をいえるグループを作る」ことを目標に考え「弱者への批判は補いのある批判」でないとますます本音をいわなくなり、批判の生産的な意味がないと思うようになる。さらに、「民衆の自己表現の一つ」である民話にも注目していく(山代1995 28)。山代はまた、『千代の青春』を書くために恩師中井正一の母千代を取材している。その時に千代が言った「聞いて覚えた言葉は忘れるが、毛穴から吸い取った言葉は忘れない」という言葉を引きながら、千代が育った竹原の、女性が「男と対等に時事問題」も議論する文教と自治の歴史に学び「人が毛穴から吸い取る歴史こそ、現代民話の根にある」と思うようになる(山代1995 31)。彼女が述べた民話や地方の歴史の話は、人々が言葉を獲得もしくは発見していく一つの例にすぎないとしても、啓蒙運動とは異なった視点に立っている。また、読者の言葉という点に関しては、浪江も「農民のための本を作る」という視点から興味深いことを述べている。浪江は「農業書が農民のために書かれていない」という驚くべき事実と直面し、その根本原因を考え始める。そして、その原因が「なくてはならない基礎知識と合理的な考え方をまだ身につけていない相手に対して、それがあってはじめてわかるような書き方をしている」点にあるという結論に達する(浪江1996 63)。つまり、執筆者側・送り手側の一方的な視点から、基礎的な知識や考え方を前提にし

て書かれた書物が多く、読者・受け手側の農民にとって、土台となる基礎知識、考え方の訓練、知識の骨組を構築していけるような農業書がなかったという。だから、「実用と基礎知識との巧みな結びつき」と「合理的精神の訓練」を備えた教材を準備するため、文章家・教育者・専門家による共同著作を考え、浪江自らも執筆する(浪江1996 65)。受け手側の言葉を獲得しようとする努力と思い、同時に、そのための教育を受ける平等な機会や環境などが整わない限り、平等なコミュニケーションは成り立たないままだろう。浪江が農村図書館運動の際に、人々の自主性を損ねずに働きかけていくことの困難を「したたかに思い知らされた」のは、このことに関係している。

次に、そう考えてきて、読者あるいは大衆が言葉に平等にもつためには何が重要なのだろうか。中井のテキストから少し逸脱するけれども、「リテラシー」の概念を取り上げて考えたい。なお、これに関しては、筆者も前に読者とリテラシー概念に関して論じたことがある。一般に、従来のマス・コミュニケーション理論は、マス・メディアの存在が受け手としての「読者」という集合的・一元的な概念を用意したと説明している。しかし、集合的な「読者」概念によって人々の個別性や多様性を説明するのは困難なうえに、様々な階層の人々がリテラシーを獲得していく過程が見えなくなる。まして、庶民・民衆はリテラシーを獲得して読者になったというような図書館史や文学史の説明は、読書が社会的慣行として成立してくる過程を無視した制度的な転倒性だと論じた。そして、誰(どのような階層)のどのような能力をリテラシーの獲得というのか具体的に見ていくことが重要だと述べた(中村1991 46-47)。一般に、19世紀はリテラシーが確立した時期とされているが、注意すべき点は、リテラシー(書字文化)の始まりから、送り手側(書き手)が受け手側(読者)より優位にあったという点だ。広義のリテラシー(書字文化)に関係する読み書き能力をもった階層は少数だったし、一般の大衆はむしろオラリティー(口承文化)の世界に生きていた。さらに、前章に述べたコミュニケーション史の視点は教育の方法を考え直すことにつながるといふ鶴見の論点に関係して、教育学における佐藤学のリテラシーの論稿を参考にしたい(佐藤2003)。佐藤は、教育概念としての「リテラシー」が公教育が制度化された19世紀末に生まれたとして、リテラシー概念の欧米における歴史性を論じている。また、

リテラシー教育のアプローチ方法を批判的に論じながら「道具的イデオロギー」のリテラシー教育において支配的な「道具的技能」の観念に言及している。すなわち、リテラシーを道具的技能とする観念は、1910年代、産業主義に呼応して現れた「社会的効率主義」に起源をもち、実証主義心理学と行動主義理論によって支えられてきたとする。今日でも「読み書き算」などの基礎技能の定着をテストによって行うというリテラシー教育の観念は、大衆的かつ支配的だ(佐藤2003 292、294)。次に、佐藤はそのような「道具的リテラシー」を批判しつつ「批判的リテラシー」の形成という課題を提示した教育学者フレイレ(Freire, Paulo 1921-1997)の理論と実践を論じている。フレイレによると、人は「象徴的意味の動物」だという。まず世界を変革し、次に世界を表象し、そして言葉を創造したのであり、したがって、彼のリテラシーの教育は前もって与えられた意味や言葉を獲得することになく、言葉を読む前の世界の文化的意味づけにある(佐藤2003 297)。また、フレイレはブラジル農村における識字教育の実践を続けたという。その点、前述した浪江の農村図書館運動と共通するものを感じる。

このように考えてみるなら、大衆の中に間主観的な合理の広がり期待した中井が、影響力のある実践を展開しえなかった理由の一つは、批判的リテラシーに相当する課題が見えていなかったからだといえはしまいか。啓蒙的な視点からのコミュニケーション論や読者論は、往々にして執筆者側が無意識的に理念として想定した読者像や読書能力(リテラシー)を前提としている。そこには、鶴見が言及した教育の方法を見直す視点や裏田が論じた図書館など、社会的な制度や慣行が始原にもっていたイデオロギー性への注意など様々な点が欠けている。読者あるいは受け手の言葉の問題を考えたとき、そこに重要なことは受け手側の自主性や自立につながる言葉の獲得なのだが、それは、リテラシー概念の歴史性から見ると批判的リテラシーの形成という課題に通底する。

### 3. 図書館のコミュニケーション

#### 3. 1 文化価値の生産と享受

再び久野のコミュニケーション論に戻る。久野はヴァレリー [Valéry, Paul 1871-1945] の『詩学序説』を引きながら、文化の創造と享受の問題に言及している。すなわち、「彼(ヴァレリー)は読者とか聴衆とか観客を『消費者』と位置づけているのですが、経済においては相互に対立する生産と消費が、芸術においては作品の制作と享受は対立するものではなく、協力関係にあり消費者の作品の享受こそがむしろ『価値の生産』である、と述べて、文化は享受されてはじめて価値となる文化価値生産のメカニズムを説明している(久野1996 39)。これは読書に置き換えていうなら、前節に引用した浪江の表現と同じく、書物は読まれてはじめて書物としての価値、読書の意味が成立するということだろう。本は読まれないうちは、「本の可能性にすぎない」(浪江1958 19)。そして、文化が成立するためには、製作者よりも消費者や鑑賞者の側が優先するのであって、そのためには、製作者側からの鑑賞者・享受者への支配がなくなるべきだとする。久野は、さらに、イギリス厚生経済学の消費者(市民)の経済学に言及している。すなわち、消費者と生産者が互いに対等というより、消費者の自由が生産者の自由を上回らなければ、選択する権利を行使しえないはずだ。けれども日本は生産者が優位になって市民に押し付ける形になっていて本当の自由文化といえないという。つまり、市民がマス・コミュニケーション、マス・メディアの圧倒的な支配のもとに受け身になっては平等なコミュニケーションなど成立しないとする(久野1996 39-40)。

次に、久野が言及しているイギリス厚生経済学と先ほど論じたりテラシーの問題を敷衍して、厚生経済学の再構成を進めた経済学者アマルティア・セン(Sen, Amartya)の平等論にふれておきたい(セン1989, 1991)。彼は、従来の平等論を「何を平等にするのか」という観点から見直そうとした(川本1994 170)。センは、「基本的潜在能力」(basic capabilities)=人がある基本的なことからなしうることに、概念を提示する。すなわち、これまでの平等論は、「快ないし欲求充足という心理的なアウトプットか(功利主義、効用主義)、よく生きるための手段にすぎない財・資源の保有量か(ロールズやドゥウオーキン)のどちらか一方に偏っていた」として、その偏りを退け「人間が財と効用の間で『さまざまな生き方=機能の充足』(functionings)を行う生き物であ

る」ことに注目し、そのような機能を選択しうる「潜在能力」(生き方の幅)のうち基本的なものに関して平等を図るべきだと主張した(川本1994 172)。これは、久野がコミュニケーションにおける平等と自由に関して述べたことを経済学の側面から同様に表現している。また、センが模索する「福祉=善き生」(well-being)の実現という主題(川本1994 173)は、中井の図書館論の基底にあった「生の全体につかえる意図」(鈴木1988 465)につながるものだと考えられるし、さらには、彼が尽力した図書館法の精神にむすびつくものだと思う。それから、センが論じている観点から現在の図書館情報学が採用している図書館活動の評価方法を見直してみると、従来の財・資源の保有量(図書館の蔵書量、資料類の貸借量など)の評価から、ようやく欲求充足の心理的なアウトプットへ移行した段階にすぎず、いずれも図書館という送り手側(製作者側)の視点に偏った方法だと思う。利用者、受け手側(消費者側)の基本的潜在能力に注目する段階にはまだ至っていない。

### 3. 2 コミュニケーションの平等

ならば、図書館と利用者の平等なコミュニケーションが成り立つには、何が重要なのだろうか。久野は、「図書館側が用意するものを市民がただ受身になって享受するだけ」ではいけないとして、まず、受け手側の自主性、能動性を主張する。つまり、サークル運動などの運動にもならない数人の間にかわされる「自主的なコミュニケーションが図書館の周囲になくしてはいけない」という。そして、「読書会などの自主的な小さな集まりが減ぶ時には、図書館も官主民従になって減ぶでしょう。それを図書館は気づいているだろうか」と述べている。さらに、サービスの相互的な視点から「今の図書館は一方的にサービスしようとしているから文化をステレオタイプ化してしまう」のであり、「市民の方も図書館にサービスしなくてはならない」と注意を促す。つまり、あらゆる文化の基本として、市民の自主的、自発的な小さなサークル、アソシエーションが重要だという。一方、図書館員が市民との平等なコミュニケーションを実現するためには、「うまい書き手にならなくてはいけない」のだけれども、図書館員は概ね「ヘタクソな書き手」で、「文章も官僚的」なため市民に読んでもらえないという。結論として、受け手側が



作り手側の支配を受けず、受け手が同時に作り手であるような「双務の枠」をもったコミュニケーションこそが真の意味における平等なコミュニケーションだと述べている(久野1996 40)。それから、久野が注意を促した図書館と利用者とのサービスの相互性という視点は、利用者を単なる「お客様」扱いしない点において重要だ。なぜなら、図書館は利用者サービスを提供する組織であって、サービスを提供して利潤を追求するサービス業の組織とは異なると考えるからだ。今、学問的な図書館サービス論を整理して展開する余裕はないが、この点は図書館員・利用者の双方において勘違いしやすい。ともかく、久野のコミュニケーション論において注目すべきことは、読者・受け手側の優位と自主性がある平等なコミュニケーションが成立するという点だろう。ただし、読者・受け手側がいかにして自らの優位と自主性をもち得るのかはここに提示されていない。

また、久野のこのような考えに関しては、中井が「委員会の論理」において論じた表現の自己疎外の問題が思い浮かぶ(全集1 95-102)。彼は、人々の言葉や思考を構成する概念が疎遠となり、自発的な表現は疎外されていくという。すなわち、概念構成の特殊性として、存在の生産が「商品性」をもつことと知的技術の領域における「専門性」をあげ、この二つの特殊性が「概念の大衆的性格」を構成し、その性格が概念自らの自己疎外を形成しているという(全集1 95)。そして、概念は「前に商品性の性格によって、無批判性を導いて」、「概念の専門性の性格によって、無協同性を導いて」大衆にとっては、いずれも「一般性より疎外され」単なる表象だけをもつに至り、やがて、概念は表象化するだけでなく極端化するという(全集1 102)。中井がいう大衆的表現の自己疎外の大筋を次に見てみたい。人々の生活に関係している事物の多くは商品であり、それには概念形成における協同性がない。商品の「実用的存在」に関する概念形成は企業専属の「技術委員会」に付託され、「客観的一般存在」に関する概念形成は、「学会およびその学会研究委員会」に付託されているため(全集1 100)、一般的にものごとを考える基本となるべき概念が、企業や学会の機構によって独占されていることになる。中井が批判する同時代の学会のギルド的な手工業的機構(家父長的關係)から「学会の学派の構造が結成」され、「個人的な嫉視、対抗、意識したあるいは意識しない

陰謀」などがあらわれ、学問の中に「独異なる縄張的根性が発生」する(全集1 100-101)。しかも、それらは今日も続いているといえるだろう。しかし、概念形成から排除されているからといって「大衆は考えることをやめるわけにはいかない」(竹内1980 197)。人々は、疎遠となった商品を手段として日常生活をし、疎遠となった概念を手段にして考え精神活動を行わないと暮していけない。つまり、人々は山代がいったような「借り物の言葉」や聞いて覚えただけの言葉に囲まれながら日常の生活をするしかない。確かに、中井は「委員会の論理」において、無批判性と無協同性から概念を救うための設計図(思惟)を用意したのだが、思惟から実践に相当する大衆の言葉のあり方は示されていない。そして、前述の久野にしても、読者が優位に立ち自主性をもつための言葉のあり方に関して明確な方法は述べていない。けれども、内省的に考えてみるなら、送り手側は方法を(全て)提示しえない、という方が正しいのかもしれない。なぜなら、送り手側が方法を提示したと同時に、それは中井が陥ったように啓蒙の側に立ってしまい、送り手側の優位となってしまうからだ。久野がいった、受け手が優位になるような自主性をもつためには、そして、浪江がいった、人々が「自主性を損なわずに」自己訓練していくためには、受け手自らが考え実践していく能動性が要求される。今、文章としてそう表現するのは簡単だが、並大抵の意識と努力からは実現しえない。また、本稿において詳しく言及する余裕がないけれども、池田浩士が「専門委員会に代行を委託する関係から脱却する」ための「共考」の言語、コミュニケーション関係を論じている(池田1988 285)のも、この点に関係する問題だと考える。

## まとめに代えて

中井正一に関しては、昔から論者それぞれに思い入れがあり多様に論じられ、中井のテキストも様々な視点から読まれてきた。彼が残していった仕事は、それだけ後世の者にとって啓発的で広い応用範囲をもっていたといえるのだろう。ただし、本稿においては、参考文献にあげた諸論考に学びつつも、筆者の現在の問題意識から彼の図書館との係わりや実践に注目した。それは

現実の人間の姿とは別に、文章はいかようにも書けると思うからだ。しかし、実践となると違う。引き受けざるを得ない様々な現実と直面して、自らの正直な姿と力を否応なく思い知らされるからだ。実践において「借り物の言葉」などは蹴散らされてしまう。中井は、戦後、国立国会図書館の副館長に就任した時、人事問題に関係した誹謗を受け、図書館界からは素人と批判を受けつつ図書館の実践に全力を尽した。「僕ら野人ですからね、ああいうところは、あきまへんな、性にあわん」(依田義賢1981 6)といいながらも、小田実[1932-2007]がいったように、中井には「へたへたと暗さに倒れ込んで行くほうが」容易な状況にあっても「シンドイ明るさ」をもち続ける「正攻法の魅力」があった(小田1965 9)。そこにこそ彼の学問と人生における美学があったのだろう。図書館に働く司書の一人として、あえて「シンドイ正攻法」を選んだ彼の実践、生き方に関心があった。

もともと、東京へ来てからの国立国会図書館の活動等に関しては、「才能の濫費であった」(鶴見1996 241)とか「文化運動の側面からとらえるならば、否とこたえたい」(稲葉1972 69)、あるいは、「日本が彼の構想を自由にとりあげ得る国であったら、どんなにすぐれた文化事業が全国に築かれていたのに」(武谷三男、久野1962 250)などの否定的な評価が前からある。筆者の単なる推測にすぎないけれども、論者らには、中井が浪江度のような農村図書館の活動に類する文化運動を広島において実践していたら、「戦後十八年間全部を見返し批判しうるような別の集団を組みえた」(鶴見1996 241)という思いがあったのかもしれない。それにしても、彼の図書館界における実践に反して、図書館人として論じられることが少ないのは残念な気がする。彼を育て、守り、励ました母堂、中井千代に関しては、山代巴の『千代の青春』があり、馬場俊明もまた母の影響を論じている(馬場1994)。しかし、中井正一の総合的な人物史論は、まだない。なお、人物史論に補足していうと、中井に関しては、従来の美学をはじめ西欧思想の観点から論じられることが多い半面、彼が敬虔な安芸門徒の中井家に生まれ育ち、略歴にもあげた第三高等学校入学後、休学して浄土教の宗乗へ参入したことなど仏教思想との関連は過去にあまり取り上げられたことがないように思う。わずかに「真宗の信仰によって精神のなぐさめを得て」といった表現(鈴木1988 461)などが見られるだけ

だ。根拠とすべき資料の存在の問題があるにせよ、中井と仏教思想の影響に関しては今後の課題としたい。

また、序に言及した中井の「図書館論」は、戦後、体系的に執筆される機会もなく図書館に関する短文の集積が残っているにすぎない。そして、後に編集された書簡集の類もない。それゆえ、中井の人物像と図書館論に関しては、周囲の人々の発言や同時代を生きた関係者の文章を参考にした。彼の学問的な中心は美学にあったが、知識や関心の範囲は、メディア論、コミュニケーション論などを含み、戦後の文化運動や図書館実践に結びつく広い領域のものであった。本稿は、「中井正一—久野収」の図書館に係わるコミュニケーション論、読者論というべき内容を論じ、中井と同時代の浪江虔による農村図書館運動と対比しながら読者と言葉の問題を取り上げた。さらに、久野の論を敷衍しながら読者のリテラシーやセンの「基本的潜在能力」に言及した。コミュニケーションの平等を可能にするような、読者＝執筆者が可能となる言語形態には何が重要なのかという点に関心があったからだ。しかし、中井のテキストからさらに展開すべき問題として、コミュニケーション史における主体概念の問い直しとリテラシー、基本的潜在能力の問題が残っている。これらに関する詳論は他日を期したい。

なお、本稿は、筆者が大学院の学生時代、竹内成明先生の「コミュニケーション論特講」に発表した中井論の構想を原点としている。『間違えな愚者』時代からのご教示、記してお礼申し上げます。

### 【参考文献・註】

引用に関して、久野収編『中井正一全集』からは「全集 巻数 ページ数」とし、他は「人名 発行年 ページ数」とした。さらに、一部人名には、中井との時代関係を見るため〔 〕内に生没年を表示した。また、参考文献は、引用文献および図書館に関するものを中心としてあげ、全てを網羅していない。なお、形式は SIST02 “Description of Bibliographic References”(2007)に準拠した。

馬場俊明, 中井正一における「母」の思想 : 『土曜日』 創刊と図書館活動, 堺女

- 子短期大学紀要. 1994, 29, p.37a-23a.
- 後藤嘉宏. 中井正一のメディア論. 東京, 学文社, 2005, 542p.
- 平川千宏. 中井正一の戦後の活動に関する文献. 参考書誌研究. 1989, 35, p.9-18.
- 平川千宏. 市民運動・住民運動資料の収集、提供、保存. 山梨英和短期大学紀要. 2002, 37, p.92-77.
- 池田浩士. “Vマス・メディア状況の言語表現”. 講座20世紀の芸術 5. 東京, 岩波書店, 1988, p.[241]-286.
- 稲葉誠也. 中井正一の図書館論. 図書館学会年報. 1966, 13(1), 1-5.
- 稲葉誠也. 図書館を拠点とした文化運動：中井正一の場合. 思想の科学, 1972, 6次(2) [別6], p.61-69.
- 稲村徹元編. “中井正一略年譜”. 文化と集団の論理 [中井正一全集 4]. 東京, 美術出版社, 1981, p.372-375.
- 柄谷行人. 丸山眞男とアソシエーションイズム. 思想. 2006, 988, p.54-69.
- 川本隆史. “IV - 1 正義と平等”. 倫理学を学ぶ人のために. 京都, 世界思想社, 1994, p.152-175.
- 北山茂夫. 学究として教師として [北山茂夫・遺文と書簡 3]. 東京, みすず書房, 1985, 354p.
- 北山茂夫 [著], 松尾尊兌編. 北山茂夫伝記と追想 [北山茂夫・遺文と書簡別巻]. 東京, みすず書房, 1991, 321p.
- 久野収編. 美と集団の論理：中井正一. 東京, 中央公論社, 1962, 300p.
- \* 『土曜日』巻頭言の引用は、上記 p.[191]-240 によった。
- 久野収. “文化新聞『土曜日』の復刻によせて”. 三一書房 [編]. 土曜日. 復刻版, 東京, 三一書房, 1974, p.1-7.
- 久野収 [述]. 久野収氏が語るコミュニケーションの古さと新しさ. 図書館雑誌. 1996, 90(1), p.37-41.
- \* この稿は、1995年11月19日のインタビューを聞き手の江森隆子氏 (編集委員) がまとめたもの。
- 丸山泰通. 中井正一の軌跡と図書館. 図書館雑誌. 1973, 67(12), p.15-18.
- 中井正一 [著], 久野収編. 哲学と美学の接点 [中井正一全集第 1 巻]. 東京, 美術出版社, 1981, 471p.

- 中井正一[著],久野収編. 転換期の美学的課題[中井正一全集第2巻]. 東京, 美術出版社, 1981, 389p.
- 中井正一[著],久野収編. 文化と集団の論理[中井正一全集第4巻]. 東京, 美術出版社, 1981, 375p.
- 中村保彦. 貸本のコミュニケーション史2. 貸本文化. 1991, 18, p.45-52.
- 浪江虔. 農村の読書運動. 東京, 新評論, 1958, 190p.
- 浪江虔著, まちだ自治研究センター編. 図書館そして民主主義: 浪江虔論文集. 東京, ドメス出版, 1996, 250p.
- 小田実. “正攻法の魅力”. [転換期の美学的課題]付録. 東京, 美術出版社, 1981, p.9-10.
- 岡村敬二. 〈表現〉としての図書館. 大阪府立中之島図書館紀要. 1980, 16, p.33-46.  
\* 『表現としての図書館』(青弓社, 1986)にも収録されているが、本稿は紀要論文から引用した。
- 酒井悌. “副館長就任まで”. [文化と集団の論理]付録. 東京, 美術出版社, 1981, p.16-19.
- 三一書房[編]. 土曜日. 復刻版, 東京, 三一書房, 1974, 184p.
- 佐藤学. リテラシー概念とその再定義. 教育学研究. 2003, 70(3), p.292-301.
- セン, アマルティア. “社会的コミットメントとしての個人の自由”. 川本隆史訳. みすず. 1991, 358, p.68-87.
- セン, アマルティア. “何の平等か”. 合理的な愚か者: 経済学=倫理的探究. 大庭健, 川本隆史共訳. 東京, 勁草書房, 1989, p.225-262.
- 鈴木正. 日本の合理論. 第2版, 京都, ミネルヴァ書房, 1978, 248p.
- 鈴木正. 中井正一の回心: 図書館にかけた夢想. 図書館雑誌. 1988, 82(8), p.461-465.
- 鈴木正. “中井正一”. 國史大辭典10巻. 東京, 吉川弘文館, 1989, p.538.
- 竹内成明. 闊達な愚者: 相互性のなかの主体. 東京, れんが書房新社, 1980, 267p.
- 東条文規. 実践家としての中井正一. 四国学院大学論集. 1979, 44, p.100-115.
- 鶴見俊輔. “序論コミュニケーション史へのおぼえがき”. コミュニケーション史. 江藤文夫[ほか]編. 研究社出版, 1973, p.4-21.
- 鶴見俊輔ほか[述]. “中井正一とわれわれの時代”. 日本人とは何だろうか. 東京, 晶文社, 1996, p.[211]-246.

\*元の文章は、『思想の科学』1963年5月号収録のもの。本稿は、上記から引用した。

裏田武夫.“B図書館と社会”. 図書館ハンドブック. 第4版. 東京, 日本図書館協会, 1977, p.25-35.

ヴァレリー, ポール. “詩学序説”. 河盛好蔵訳. アラン; ヴァレリー[世界の名著続12]. 東京, 中央公論社, 1974, p.464-492.

山尾幸久. 北山茂夫氏の人物史論. 歴史評論. 1995, 537, p.38-43.

山城巴. “城間成順君の手紙から”. [文化と集団の論理]付録. 東京, 美術出版社, 1981, p.2-6.

山代巴[述]. 岩はいまだ割れず : 民話で描く民衆の姿. 週刊金曜日. 1995, 59, p.28-33.

山代巴. 千代の青春. 東京, 径書房, 1996, 344p.

依田義賢. “裸の正一ここにあり”. [転換期の美学的課題]付録. 東京, 美術出版社, 1981, p.5-6.

(なかむら やすひこ。2008年5月7日受理)